

# 音楽教育における学びの連続と蓄積を考える — 幼児期から学齢期の音楽教材から —

藤田 光子<sup>1)</sup> 綿引 由佳<sup>2)</sup>

Continuity and Accumulation of Learning in Music Education:  
From Teaching Materials for Preschool through School-Age Children

FUJITA Mitsuko<sup>1)</sup> WATAHIKI Yuka<sup>2)</sup>

## 【要 旨】

幼児期の表現活動から児童期さらに中学校への学齢期の音楽教育に関する接続期の学びの連続と蓄積についてそれぞれの段階の教材や楽曲を例に考察する。幼児期の表現活動と学齢期の低学年の音楽科の学びは決して乖離したものではなく、連続性とその蓄積によって成り立っていることは明白である。保育者・教育者の養成校においては小学校教諭に併せ幼稚園教諭、保育士の免許資格を取得する場合がある。幼児教育を学び、小学校教育を学ぶうえでその連続性や学びの蓄積は重要で、各域の特徴を踏まえ学習することが重要となる。小学校音楽科は教科担任制が進んでいるが、低学年はクラス担任が指導することが多く、幼児期の教材と学齢期の教材について互いを知ることが重要である。また小学校高学年と中学校の接続も同様に考えると、互いを知ろうで教材の理解を進めることは不可欠である。ここでは幼児期から学童期の音楽の学びを連続と蓄積という面から教科書掲載の教材を視点に考察し、保育者・教育者養成における音楽教育指導の在り方の糸口とする。

## 【キーワード】

学びの連続 学びの蓄積 音楽教材 教科書

## 1. はじめに

平成20年の学習指導要領の改訂後、「小・中の連携」については多くの研究がなされている。「小中連携鑑賞活動におけるカリキュラム開発の基礎調査」では鈴木ら（2016）が学習指導要領と教科書掲載の鑑賞教材に関する傾向につい

て基礎調査を行っており小中の教材面の連携配列について述べられている。

平成29年改訂の現行学習指導要領が全面実施され、令和6年度は教科書の改訂の時期であり、いわば現行学習指導要領における成熟期にある。そこで、ここでは教材の連続性を視野に保幼小、及び小中の教科書掲載楽曲を例に分析と考察を行う。令和6年度の小学校教科書改訂

<sup>1)</sup> 別府大学短期大学部 <sup>2)</sup> 鳴門教育大学教職大学院 高度教育実践専攻（徳島県阿南市立加茂谷中学校教諭）

に関する変化の流れとしては、2次元コードによる教材提示や、デジタル化、動画音源の使用についてなどが挙げられる。コロナ禍を経て変化は急激であるが、教育の現場や大学教育でもその変化に対する浸透性は明白である。

小学校から中学校の9年間を見据えた場合、小学校入学時の児童が「音楽科」の授業を経験するスタートであると考えがちであるが、実際には入学時すでに児童は幼児期からの音楽活動を十分に行っており、学期よりむしろ幼児期のほうが音楽活動に接していた状況で入学すると言える。小学校教員養成だけを踏まえると1年次をスタートと考えるものも多いが、平成29年小学校学習指導要領では「(6) 低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした総合的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。」<sup>1)</sup>が明記されておりそれらを切り離して考えることはできない。

さらに、令和5年度教育研究公開シンポジウム報告書(プロジェクト研究「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」)幼児期・架け橋期の教育の質向上について考えるでは、幼小期の接続に関する「懸け橋期」の重要性が謳われている。この架け橋期に重要な役割を果たすのが「生活科」であると言われているが、学習指導要領にあるように「音楽科」と「生活科」の科目横断した取り組みが数多く実践されており、「朝の会」「モジュール時間」を活かしたスタートカリキュラムの事例も多くある。1年次当初の仲間作りや緊張もあり、期待もある中、違いを教えたり、小学校はこんなものだという雰囲気作りをしたりすることも重要であるが、今まで学んできた歌を小学校ではどのように歌っていくのか、さらには扱ったことのない楽器を扱える喜び、たくさん覚えた歌以外に多くの曲との出会いを大切に、学習の蓄積を

活用し、その連続性をうまく活用した授業作りを考えていく必要がある。「すべての芽生えは幼児期」であることをすべての教員が認識し、教育を進める必要がある。令和4年度教育課程の編成・実施状況調査結果(文部科学省)からもわかる通り小学校音楽科の指導については、第1学年においては専科が17.4%、第2学年においても27.2%となっている。つまり小学校では音楽専科の先生が音楽の授業を必ずしも行っているわけではなく、特に低学年においては音楽専科でない先生いわゆる「クラス担任」の教師が音楽の授業も行う。

これらの状況を踏まえ、本研究では幼児期に扱う楽曲と小学校低学年で扱う教材、さらに小学校高学年に扱う教材と中学校における教材の中から例を参照し、双方からの理解を深めることができるような方向性を持ちその題材の比較や課題点を考察することで、保育者・教育者養成時期における音楽教育の在り方の方向性を考える。

## 2. 学びの連続と蓄積から

保幼小の連携研究の中で保育者は、「乳幼児の自発的な遊びの中の活動と一定の学習内容の教科の中の活動の違いが大きいという捉え方をしている」<sup>2)</sup>とある(2017星野)。実際に双方の楽曲や教材を理解する場面は限られており、養成段階での理解がより重要になってくることが期待される。

「こどものうた200」「続 こどものうた200」に掲載されている楽曲は保育者・教育者養成においても活用されている楽曲集であるが、養成校においても50曲を課題曲として弾き歌い課題として提示している。その中で、【表1】のように幼児期に歌い遊んだ楽曲が小学生になって教科書に登場していることがわかる。「知っている」「歌える」「たくさん遊んだ」という意識をもって取り組んでいけることは子どもたちにとって安心できる材料であり、「音楽」という科目としての捉えより柔軟に浸透していくことができる。それには授業を行う教員側にその

理解が必要であり、子どもたちがどのような幼児期を送り、どのような楽曲とともに「遊び」「表現」してきたかを知ることは急務である。同様に、小学校時代にどのような楽曲や音楽に出会い、学びを深め中学校を迎えているかも同様であると考え。小学校高学年では専科教員の授業が主流であり、中学校では科目担当が授業を行う。幼児期から小学校にかけての課題の在り方とは違いがあるが、それぞれ接続期であることを踏まえて、双方の教材や楽曲を理解し、知ることにより深い学びへと進んでいくことができる。

本稿ではそれぞれの期に出会う楽曲からいくつかの例を参照し、表現における楽曲と小学校音楽科における題材などを踏まえた教材について、さらに小学校高学年から中学校にかけての教材との出会いとその課題点について考察する。

### 3. 保幼小の楽曲から

#### (1) 「こどもの歌」からみた小学校教材

幼児期の音楽表現における楽曲は生活に沿った形、行事、季節などを踏まえた扱いが中心であると言える。遊びと関連したり感じることを表現したり、歌ったり聴いたり多くの音楽に関わる活動を行っている。一方小学校では、「音楽科」として科目の1つとして学ぶが、特に低学年において幼児期に出会ったであろう楽曲を「音楽科」の中で「教材」として扱う。題材としては「みんなで楽しく」「日本の歌」「心の歌」「うたうたうごいてみんなでおんがく」「はくとリズム」「きせつのうた」等として扱われる。

【表1】のように養成校での弾き歌い課題曲

【表1 こどものうた課題曲より】

曲名	作詞	作曲	編曲	拍子	調	小学校教科書掲載 (R6)							
						教育芸術社			教育出版				
						1年	2年	3年	1年	2年	3年	4年	
チューリップ	近藤宮子 日本教育音楽協会	井上武士		4分の2拍子	へ長調				○				
ちょうちょう	不詳	スペイン民謡		4分の2拍子	へ長調				○				
ぶんぶんぶん	村野四郎	ボヘミア曲		4分の2拍子	へ長調	○			○				
かたつむり	文部省唱歌			4分の2拍子	二長調	○			○				
こぎつね	勝承夫	外国曲		4分の2拍子	ハ長調		○						
メリーさんのひつじ	高田三九三 (訳詩)	アメリカ民謡	森義八郎	4分の2拍子	へ長調			○					○
とんぼのめがね	額賀誠志	平井康三郎		4分の2拍子	ハ長調		○			○			
おもちゃのチャチャチャ	野坂昭如 吉岡治 (補作)	越部信義	伊東慶樹	4分の4拍子	ハ長調				○				
たなばたさま	権藤はなよ 林柳波	下総皖一		4分の2拍子	へ長調	○			○				
うれしいひなまつり	山野三郎	河村光陽		4分の2拍子	ハ長調	○			○				
たぎび	巽聖歌	渡辺茂		4分の2拍子	ハ長調				○				
おしょうがつ	東くめ	滝廉太郎		4分の4拍子	へ長調	○			○				
やぎさんゆうびん	まどみちお	團伊玖磨		4分の2拍子	へ長調				○				
こいのぼり	えほん唱歌			4分の3拍子	二長調				○				
おつかいありさん	関根栄一	團伊玖磨		4分の2拍子	二長調				○				
シャボン玉	野口雨情	中山晋平		4分の2拍子	二長調		○						
ミッキー・マウス・マーチ	辻健児 (日本語詞)	ジミー・ドッド		8分の6拍子	へ長調		○	○			○		
まっかな秋	薩摩忠	小林秀雄		4分の4拍子	へ長調						○		
てのひらをたいように	やなせたかし	いずみたく	伊東慶樹	4分の4拍子	ホ長調		○						
いぬのおまわりさん	佐藤義美	大中恩	伊東慶樹	4分の4拍子	二長調				○				

を見ると幼児期・保育期に使用する楽曲が小学校1・2年生でも多く扱われていることがわかる。「チューリップ」「ちょうちょう」「ぶんぶんぶん」「かたつむり」「こぎつね」「メリーさんのひつじ」「とんぼのめがね」など季節に関連する楽曲・動物が登場する楽曲、「おしょうがつ」「うれしいひなまつり」「こいのぼり」等の年中行事や節句に関わるものが挙げられる。それらに分類されない楽曲としては「おもちゃのチャチャチャ」「シャボン玉」がある。いくつかの楽曲に着目してその内容と教科「音楽」における題材や目標を照らし合わせてみる。

「おもちゃのチャチャチャ」は「リズムをかさねてあそぶ」、「シャボン玉」は「うたいつごう にほんのうた」とされている。低学年では「はくをかんじとろう」「はくにのってリズムをうとう」など体で十分に「はく」を感じ取る学習が展開される。幼児期に自然に歌ったり、身体を動かしたりしていた楽曲から「音楽の要素として」「はく」を学習する。特に教育出版の教科書では「音楽ランド」として歌詞は1番のみを掲載し、多くの子どものうたを掲載していることがわかる。掲載の特徴としては「楽譜」の記載がないことである。楽曲を楽譜として扱うことを主流とせず、これまで歌い継いできた曲に再度出会うことがねらいとされているように感じる。これらの楽曲は幼児期から楽しく歌い込んできた多くの楽曲が小学校での音楽科の教材として出会い、子どもたちがその面白さや音楽の特徴・構造などに気付いていく段階の蓄積と連続性は非常に大切にしたい内容である。

「シャボン玉」(教育芸術社)では歌詞の記載のみであるが、幼児期にシャボン玉で遊びながら歌ったように小学校の教材でも歌唱教材として扱ってほしい。音の抑揚や日本の遊びから風情を感じることができる美しく憂いを持った楽曲で「かぜかぜふくな」と願いを込めて歌われることを願う。

## (2) 小学校教材からみたわらべうた

次に小学校の教材から幼児期の楽曲を考察してみる。幼児期には「わらべうた」等の伝承音

楽が多く保育や遊びの中で扱われているが、幼児期から小学校低学年にかけてのかけ橋になる教材としてこの「わらべうた」は非常に取り組みやすい。小学校の教科書掲載の「わらべうた」を参照してみると【表2】からわかるように小学校第1・2学年においてわらべうたが遊び歌・絵描き歌・動き歌として教材化されている。題材としては「にほんのうたをたのしもう」「わらべうたであそぼう」であり、ここでの学習課題は「わらべうたのたのしさにきづいてきいたり、うたったりすることができかな」「うたっとうごいてみんなでおんがく」というものであり、身体を動かしながら遊びとともに日本の歌として多くの遊び方や友だちとの関わり変化を伴い体験し学習する。「豊かな感性として、心を動かすこと」「感じたことを音で表したり」「楽しさを味わう」ことがねらいとされている。小学校低学年の音楽科を同じ視点で見えていくと「あそびながらおんがくを楽しむ」「たのしいところをみつける」「あそびかた」「ともだちと声をあわせる」「ためしてみる」等が学習の課題の中に見えている。さらには「まねをしたり、くふうしたり」「ひととかかわりあったり」「音楽づくり」へと発展していることがわかる。中でも「わらべうた」については題材「にほんのうたをたのしもう」教材として「さんちゃんが」の絵描き歌、「おおなみなみ」の長縄を用いて体を動かして楽しむもの、「おちゃらかほい」の友だちと一緒に向かい合わせて手遊びをするわらべうたが掲載されている。学習課題としては「わらべうたのたの

【表2 教科書掲載のわらべうた】

わらべうた		教育芸術社		教育出版	
		1年	2年	1年	2年
1	ひらいたひらいた	○		○	
2	さんちゃんが	○			
3	おおなみなみ	○			
4	おちゃらかほい	○		○	
5	ずいずいずっころばし		○		
6	あんたがたどこさ		○		
7	なべなべそこぬけ		○	○	



## 【譜例1 ひらいたひらいたより】

しさにきづいて、きいたり、うたったりすることができるか」幼児期に扱うわらべうたとしては歌いながら体を動かしたり、ともに遊んだり楽しんだりするが、小学校の教材としては「ようすをおもいうかべたり、たのしいところをみつけたり」「わらべうたがどんなものか」「あそびかたやはやさのくふう」さらには「こえを合わせること」「ほかのわらべうたへの発展」も視野に入る。第2学年では「ずいずいずこころばし」「あんたがたどこさ」「なべなべそこぬけ」などやや複雑な歌詞や動きで遊びを含む教材であり、3つの音での「音楽づくり」への発展内容も含まれる。「リズムの工夫」や楽器での演奏も含まれ「せんりつあそび」の要素でありながら題材「にほんのうたでつながろう」では低学年の題材ではあるが、多くの要素を含み遊びからの発展は非常に幅広い印象である。

楽譜として掲載されていたのは、共通教材である第1学年「ひらいたひらいた」と教育芸術社第1学年「おちゃらかほい」第2学年「なべなべそこぬけ」。【表3】からわかるように教育出版では鑑賞として2次元コードから挿絵の動く遊び方と歌が示されている。教育芸術社では教科書への楽譜の掲載と併せ、2次元コードにより旋律のみを示した音源を聴くことができる。歌いながら動くことさらには友だちと一緒に遊ぶことでわらべうたの楽しさに気付くことができるという特長がみられる。教育出版ではこのわらべうた教材は年間指導計画案において「教育基本法との対照／他教科等との関連として、幼・保との関連スタートカリキュラム生活科との関連公共の精神／伝統と文化の尊重／創造性を培う」<sup>3)</sup>とあり、幼・保との連携が十分に意識されている。さらに幼児期に遊んだことのあるわらべうたが「様子を思い浮かべること」

「たのしいところを見つけ合うこと」「様子が変化すること」「速度を変えることができる」「動きの工夫」「伝えあうこと」「声を合わせること」「うたでお話をする」や「3つの音で旋律を作る」音楽づくりへと学習活動が広がりを見せる。これら小学校歌唱教材としての「わらべうた」を扱う課題点を以下に挙げる。

## 第1学年 教材「ひらいたひらいた」

題材「うたっておどってなかよくなろう」で教材掲載されており、その他の「わらべうた」は「にほんのうたをたのしもう」に掲載されている。学習指導要領との関連では共通教材であり、歌唱として扱う。

養成校においても小学校においても歌唱の際共通する課題点として、【譜例1】楽曲の後半部分「いつのまにか つぼんだ」の部分が挙げられる。

前半は拍にのりやすくテンポよく歌唱できるが、音形の変化とともに終わり4小節についてはやや捉えにくい。しかし円になって遊びながら歌唱する際は「つぼんでいく」「ひらいていく」体系の変化とともに歌うと、遊びの中では歌いやすいことがわかる。【表3】からわかるように、この「ひらいたひらいた」は教育出版では「うたっとうごいてみんなでおんがく」「ひらいたひらいた」もその他の「わらべうた」も同一題材にて掲載されている。

もう一例として「さんちゃんが」は絵描き歌であるが、「おくちをとんがらかして ぼくたぬき ばってん」の部分がやや歌いづらい。この2曲の共通点としては音価の長い音の捉えは変化もつけやすい分歌唱の際はやや捉えにくい様子が見受けられる。絵描き歌として書きながら歌う、遊びとして捉え絵描きの速度に合わせ

【表3 わらべうた関連の題材と教材】

	教育出版	教育芸術社	教育芸術社
学年	第1学年	第1学年	第2学年
題材名	うたっとうごいてみんなでおんがく	にほんのうたをたのしもう	日本のうたでつながろう
掲載教材	サンダーバード ピンクパンサー ぞう なみをこえて ゴーアンドストップ かみつれっしゃ ひらいたひらいた わらべうた(おちゃらか・なべなべ) かたつむり	さんちゃんが おおなみこなみ おちゃらかほい	ずいずいずっころばし あんたがたどこさ なべなべそこぬけ 名前でせんりつあそび
2次元コード	歌と絵による動きの動画	拍と旋律の音のみ	拍と旋律の音のみ
注	おなじうたでもいろいろなうたいかたやあそびがあります	わらべうたには、おなじうたでもいろいろなうたいかたやあそびかたがあるよ	
楽譜の記載	なし	あり	あり

て歌うとうまくいく。範唱を聴いたり、動画やデジタル教科書による視聴をしたりする前に遊びを第一義とすることで捉えやすく「わらべうた」の変化や動きを楽しむ遊びとしておもしろさを味わいやすい。

#### 第2学年 教材「ずいずいずっころばし」

題材「にほんのうたでつながろう」で教材掲載されており、歌唱と鑑賞の扱いである。

歌唱の際、濁音や促音の登場で面白さを感じながら遊ぶ様子が見られるが、課題としては途中からの歌詞が曖昧になる。「いきっこなしよ」の部分は音価の変化に伴って、前述のわらべうたと同様に歌う人によって変化がみられる。複数名で歌いながら遊ぶことや歌えるものが歌を伝承していく形が自然であることを考え、口頭伝承として歌い遊びながら覚えていくことを意識する必要がある。伝承によって歌い方などの変化も踏まえておくと面白さと身近さを加えることができる。

#### 4. 中学校教材から

小学校5・6年生の音楽科で学習する楽曲の中には、【表4】のように中学校音楽科で再度学習する楽曲が数曲含まれている。

【表4 中学校共通教材と小学校高学年掲載】

	曲名	作詞	作曲	小学校教科書掲載(R6)			
				教育芸術社		教育出版	
				5年	6年	5年	6年
1	赤とんぼ	三木露風	山田耕筰	○		○	
2	荒城の月	土井晩翠	滝廉太郎		○	○	
3	早春譜	吉丸一昌	中田 章				
4	夏の思い出	江間章子	中田喜直				
5	花	武島羽衣	滝廉太郎		○		
6	花の街	江間章子	團伊玖磨				
7	浜辺の歌	林 古溪	成田為三				

それぞれの学習指導要領の目標に合わせて、学習のめあては異なっている。それらの教材をどのように読み解くと、小中の学習のつながりが見いだせるかを考えるため、今回は例として、三木露風作詞、山田耕筰作曲の「赤とんぼ」を取り上げる。この教材は、小学5年及び中学1年のものである。

まずは、小学校の学習として教科書や指導書を基に分析する。小学5年の教科書「音楽のおくりもの」(教育出版社)では、「にっぽんの歌みんなの歌」として掲載されているが、他の楽曲のように教科書の中には「めあて」は明示されていない。教師用指導書研究編においては3つの目標が掲げられている。1つ目は、思いや

意図にあった表現技能、具体的には呼吸、発音、自然で無理のない発声、響きのある歌い方などの技能習得に関するものである。2つ目は音楽的な要素の認知とそこから感じ取る音楽的な美しさを関連づけて自らの表現に生かすという、思考力・判断力・表現力の領域についてである。3つ目は、言葉の抑揚や曲の特徴を生かした表現に興味をもち音楽表現を主体的に楽しむという、「学びに向かう態度」についてである。

学習は通常1時間扱いであり、三木露風の詩や教科書に描かれている挿絵から情景を想像しながら歌唱することが教師用指導書には示されている。しかし、実際に毎年赤とんぼを見て育つ地方の児童たちと都会で育つ児童たちには思い浮かべる情景が日常であるか否かという大きな隔たりがあるという懸念がある。作詞者や作曲者が活躍していた時代の日本の風景を思い浮かべたり、歌詞の内容を理解したりするためには、補助教材として映像教材を準備しておく必要があると考える。教科書は全国で統一されているが、児童たちの生活は住んでいる地域や生活様式など属している社会によって様々である。音楽の良さを感じ取り表現に生かすためには、歌詞の理解や、作詞者あるいは作曲者の意図やイメージの理解は不可欠で、それは学習指導要領に示されている「思考力・判断力・表現力等」や「主体的に学習に取り組む態度」に大きく関連している。特に現代の小学生にとって「昔の日本の風景」ははるか彼方にあると推測する。よって、小学校での学習には映像資料を十分に用いて指導することが、児童たちの想像力を培い表現に生かせる重要な手立てではないだろうか。

小学校では本楽曲の学習後に「音楽の旅」として、日本に伝わる歌や声の表現を学習する。その中に、生活の中で耳にする声の表現として「石焼き芋売りの呼び声」や「相撲の呼び出し」などの学習が含まれている。「小学音楽 音楽のおくりもの5」(教育出版2019)には、それらの音の高低を採譜した視覚的な資料が示されているが、これは日本語の「話し言葉」のイン

トネーションとの関連に気付かせるものとも考えられ、後述する中学校での「言葉と旋律」の前段階学習として意義がある。

次に中学校での学習を考える。本楽曲は「中学音楽 音楽のおくりもの1」(教育出版2019)の中で、小学校時と同様に「日本の歌 みんなの歌」として指導する。中学では生徒用教科書に「曲の形式を生かして表現を工夫しよう」とめあてが提示されている。しかし中学校現場では、楽曲の形式についての学習はさることながら、小学校時の学習を基盤として詩の理解を深める。小学校教科書における楽曲の提示と少し異なり、生徒の成長段階に合わせ、挿絵ではなく実際の赤とんぼの写真が掲載されている。小学校時に比べ学校や家庭での学習や経験したことが増え、ステレオタイプの里山の風景画から楽曲をイメージさせるのではなく、歌詞そのものや「赤とんぼ」という言葉から想像できる季節感や個々の生徒の思い出などから情景を想像するように仕組まれているのかもしれない。

それに加えて、作曲者が日本語の抑揚を崩すことなく美しい旋律を作り上げたことで、短いながらもまとまりのある音楽になっていることを理解し歌唱表現することを目標として学習していることが多い。また、楽譜の中に記されている強弱記号が、日本語の抑揚と旋律の関係をより自然にしていることを、歌唱技能を身に付けながら表現できるように工夫することもめざす。

「中学音楽 音楽のおくりもの1」では、本楽曲の学習前に「夏の思い出」(江間章子作詞、中田喜直作曲)が掲載されている。「夏の思い出」も年代的には少し現代に近いが、日本の美しい風景を詩と音楽で表されたものである。教科書の中で、この2曲は「旋律進行の対比」が学習内容として示されている。小学校時から学んできた「日本の歌」は、日本語という自分たちの母語と音の進行、あるいは旋律との関係によって、相互にその美しさを引き出す工夫がなされていることや、言葉と音楽の間には深い関係があることを学ぶ。これらの学習で身に付けた知識や技能を基に、中学校では、日本語の抑

揚を考えて旋律を作る表現領域の創作分野へ学習を展開できるように示されている。

【中学1年「赤とんぼ」の実践例】



【図1 ワークシートから】

【図1】のワークシートを授業実践で使用しているが、生徒たちは自分たちの話す方言と共通語と呼ばれる言葉には「高さ」や「強さ」におけるアクセントの違いに気付く。なるべく共通語で音読し、それに合わせて線を描いていき、グループで話し合う。一方で、楽譜の旋律部分を線で結ばせておく。そうすると、楽譜上の線とワークシートに記した線がよく似たカーブを描いていることに気付く。この学習から、旋律と言葉の関係性を学び、実際の歌唱で旋律進行のイメージがしやすくなり、表現しやすくなる。また、言語的な抑揚、情景が浮かぶような文学的な詩の味わい、無理のない旋律、それを音楽的に昇華させる伴奏の和声など、授業の展開によってより深く楽曲の良さを味わわせることができる。

ここまで、小学校、中学校で共通して学習する楽曲「赤とんぼ」を教材として分析したが、教師によって様々な指導の視点や展開の仕方があるであろう。教科書には多くの「日本の歌」のような楽曲、特に小学校では多くの「文部省唱歌」が掲載されている。これは学習指導要領「内容の取扱いと指導上の配慮事項」の中に「我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの」と記されているからであろう。現代においては、生徒や教師を含めほとんどの人々が、急速に変化し続ける社会の中で、それに比例したように変化する言語や、言語と音楽との関わりの形の変化のスピードに対応しながら生活している。その中で、文字数が少ないにも関わらず、また旋律が複雑でないにも関わらず、日本の自然や文化などを豊かに表現している楽

曲を音楽科の教材として児童・生徒たちが系統的に学習していくことは、言語学的、芸術的、グローバル的観点等から考えても、その必要性があると認識している。

## 5. 今後の課題と展望

本稿では幼児期から学齢期にかけての共通する音楽教材を例に楽曲の扱いに関する分析と課題を連続と蓄積を踏まえて考察した。

低学年では、幼児期に扱った楽曲について「知っている」「歌える」等の意識からより好意的に音楽に導入していけることが必要である。「わらべうた」では遊び要素を多いに取り入れ、伝承されている歌唱をさらに歌い込み、音楽的要素の理解に繋いで行くことができると感じた。

演奏することを主眼に置くと拍・リズム・速度などの音楽的要素は重要ではあるが、教師側もその要素を正確に再現することに着目しがちになり、楽しさや変化、工夫などに着目することができにくくなる。鍵盤などを使用しない形、無伴奏での歌唱を充実させる必要がある。今回教材として取り上げた「わらべうた」の例は特徴として①音域が狭い②抑揚が複雑でない③遊びや動きの要素と変化のおもしろさ④困難に感じない読譜が挙げられる。

低学年では教師がすべての音楽科の授業において「ピアノ伴奏」や「弾き歌い」や「演奏」をすることは少なくなりつつある。デジタル教科書の使用やICTの活用を踏まえると使用音源を聴き分けたり、テンポを指定したり、音源による歌唱を指導したりという場面は音楽技術と併せますます必須となってくる。しかし低学年の教材による学習を充実させる手立てとして教師の声による範唱は重要であり、今回取り上げた教材では口頭伝承にて伝えられていくものもあり、丁寧に旋律を範唱する技術は、子どもの目を見て息づかいを感じる指導の上でも必要である。教師が伝承していく姿勢をもって授業に臨む必要がある。

高学年で扱う教材においても日本語の抑揚や

響きまた地域性をも意識しつつ、中学校で学ぶ連続的教材としての鑑賞活動の充実はまだ工夫の余地がある。教員養成段階では、どの程度の音楽的段階と技術の習得が必要であるかという点は、今後学びの連続と蓄積を踏まえ、教師の音楽的力量という視点で整理する必要性を感じている。

## 引用文献

- 1) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説  
音楽編 文部科学省 p120
- 2) 幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察—保育者の音楽意識の調査から—星野英五 名古屋芸術大学研究紀要第38巻（2017）
- 3) 教育出版 小学音楽 おんがくのおくりもの年間指導計画案2024. 9. 30 p 1  
[https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/ongaku/files/r6ongakul\\_nenkei\\_2404.pdf](https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/ongaku/files/r6ongakul_nenkei_2404.pdf)

## 参考文献

1. 小中連携における鑑賞活動のカリキュラム開発の基礎調査—教科書分析を通して—  
鈴木慎一郎・大野桂・廣富恵美子（2016）『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第13巻第1号，鳥取大学
2. 令和5年度教育研究公開シンポジウム報告書（プロジェクト研究「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」）幼児期・架け橋期の教育の質向上について考える
3. 令和4年度教育課程の編成・実施状況調査結果  
文部科学省
4. こどものうた200 チャイルド社
5. 続こどものうた200 チャイルド社
6. 小学生のおんがく1 教育芸術社令和6年小学生のおんがく1 デジタル教科書
7. 小学生の音楽2～6 教育芸術社令和6年小学生のおんがく2 デジタル教科書
8. 小学音楽 音楽のおくりもの5 6 教育出版  
令和6年
9. 教育芸術社 年間指導計画案2024. 9. 30  
<https://www.kyogei.co.jp/textbook/es/es-r6/document#nenkei>
10. 教育出版 年間指導計画案2024. 9. 30  
[https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/ongaku/files/r6ongakul\\_nenkei\\_2404.pdf](https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/textbook/shou/ongaku/files/r6ongakul_nenkei_2404.pdf)

11. 小学校学習指導要領音楽編 平成29年告示 文部科学省
12. 幼稚園教育要領 平成29年告示 文部科学省
13. 保育所保育指針 平成29年告示 厚生労働省
14. 中学校学習指導要領 音楽編（平成29年告示）文部科学省